北海学園大学附属図書館報

図書館だより

1995.10.10

第17巻3号

通巻135号

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library

カレント・エッセイ③

空よ

斧　泰彦

よほど幸運に恵まれたのか、その日は朝から見渡すかぎりの世界がまるで洗い立てのようにすがすがしかった。ことし9月15日、「敬老の日」の札幌の空は、これ以上注文のつけようのないほど澄みきっていた。買い物がてらの散歩に出て、この際とばかり深呼吸を繰り返す。

頬をなでる微風の心地よさ。うっとりとしていた耳に、なにやら広報車のものらしいマイク音が響く。そうだ。この日はたまたま地元にある豊平川神社の祭礼にも当たっている。「豊平川神社」などという名前を聞けば、川の長さから考えて、そぞかし大きな神社であろうと想像する向きがあるやもしれぬ。実は、さにあらず、国道36号線の「豊平神社」と比べても、まことにちっぽけな社なのだ。おまけに、現在は肝心の社なりご神体なりが何処に鎮座ましますやら、日ごろ人目に触れることなどめったにないことから、普段は地元の人びとにすらその存在を忘れられている程度のものなのである。なのに、祭礼の当日ともなれば、ちゃんと町内会（なんと、その地域内に北海学園大学を含む「旭水町内会」ですぞ）の世話役が同行して子供神輿が旭町と水車町界隈を練り歩くことは忘れない。マイクの声は、まもなく子供神輿がやって来ますよと告げているのであった。

「豊平川神社」は、昔――といっても、筆者がこの堤防を歩いて中学に通っていた先の大戦中――たしか豊平川の堤防に沿った畑の一角にあったはずだ。かつて一面のリンゴ畑であったこの一帯も開発の波にのまれて様相は一変してしまった。堤防にくっつくように、ひっそりと建つ小さな祠に過ぎなかった川の神様も、つぎつぎ建ちはじめた住宅に押しまくられて移転を余儀なくさせられたらしい。神様が勝手に遷されてよいのか、神社を人間の都合で安易に引っ越しさせてよいのか。そんな思いに駆られるのは、オウム真理教を始めとするさまざまな宗教教団の事件頻発で、「宗教とは何ぞや」と考えさせられることが多い故であろうか。

いや、そう別に深刻ぶることはない。色即是空、空即是色、すべて現世の事物や現象は因縁によって生じたもの、ほんらい空無のものなんだとか。この世の物には実体がなく、それがそのまま一切の存在であり、その本然の姿であるんであーるなどと、雲をつかむような説明に分かった振りをしながら当座を切り抜けるのが凡人の処世術であろう。細かいことには目をつむって大らかに暮らしたいものだ。引っ越しなどは朝飯前を地で行ったのが北京の世界女性会議であった。国連主催のこの会議、当初は市中心部の体育施設で開催されるはずだった。世界のあちこちから、うるさ型？　の女性が集まってがやがややられたら、今は金儲けに熱中している市民たちも刺激されて天安門事件の二の舞はともかく、何が起きるやら知れたものでない。そこで直前になって中心部から55キロ離れた、同市民の水がめの一つ、密雲ダムに近い懐柔具（行政区画上は北京市の中ではある）に会場を変更したのである。中国当局の体質は、89年の天安門事件をはさんで87～90年、筆者が北京で暮らしたころと全く変わっていない。会議に参加した知人の一人が、入国ビザを受け取ったのは出発当日の朝。こうした手法も昔のままだ。

変わらないというより、もっと悪くなったのが北京の空。抜けるような青空、澄みきった秋空が北京から消えて久しい。いつもどんより、くすんだようで、透明感とは縁遠い。粉塵、煙塵に大陸特有の砂塵。暖房用の石炭で街全体がすすけるのはもうすぐ。天空は、地上の営みを映している。

（おの　やすひこ　教養部教授・マスコミ論）

インドネシア通信(1)

山根對助

第2報　1995年8月1日着信分

任期の半分が終わりました。昨年に続く宮沢賢治の童話作品の翻訳と『北の国から』の翻訳の指導は、まあ順調に進んでいるといっていいのでしょう。

パジャジャラン大学日本学科のスタッフの総数は24名、うち日本留学中の者が2名、私の研究会のメンバーは20名、不参加者は2名。一人は日本でも見かける教師というよりは政治家、一人はコドクの人。

この2つの仕事は、パジャジャラン大学日本学科の総力を結集していると、指導担当者御本人がいうのもどうかと思いますが、そういっても言い過ぎではないかもしれない。まあ、ともかく頑張っているのですね。

気のせいか、「外国でだけ頑張っても仕様がないですね」という声も聞こえるようですが。今日は、インドネシア事情についての皮相的見聞などをお話しましょう。

7月24日。テレビで日本に枝豆を輸出することになったと報じていました。この国ではkacang hijau(青豆)というらしいのですが、アナウンサーは「エダマメ」と連呼しながら輸出協定調印のことなどを報じていました。山根對助氏は知る人ぞ知る、百姓です。とくに食べる枝豆学の権威ですから、「そんなもの輸入してどうするの？」と思いながら見ていました。納豆にするなら同じことか、とも思いましたが、いや待てよ、「エダマメ」と叫んでいるところをみると「枝豆」として売るつもりかもしれないなとも思い、「日本人の味覚をバカにするのか！」と怒っています。山根氏の味覚では「枝豆の生命」は1日ともたないのですから。ついでながら、ここの日本食品専門店で、冷凍の枝豆を売っています。200gで1,400 Rp(ルピア)、ということは56円。

7月26日。皆さん、「円高」を実感していますか。私はなかったですね。ところが、インドネシアに来てみると実感できるのです。どうしてでしょう？

煙草を例にとりましょう。日本の煙草はどこにも置いていません。アメリカの煙草はあるのに。なぜか？

今この地で私が吸っている「アルダス・ライト」は850 Rpですから日本円で35円。ケントでもマルボロでもダンヒルでもラッキーストライクでもアメリカ煙草は、だいたい1,600 Rpで、円に直すと65円ぐらいですか。これならインドネシア人でも手が届かないでもありません。日本の煙草は20本入りで、たいてい240円ぐらいでしょう？　240円は、6,000 Rpです。とてもじゃありませんが、だれが買いますか。私の青春期は、洋モクが「豊かさ」の象徴だった時代ですから、この差は感無量です。円高の威力ってすごいですね。

つぎは米。価格を言う前に一つ。この国の公務員の給与は1部米で支給されます。どうしてこんなことをするのかというと、私の推測では政府は、①現金を支給したくない、なにしろケチだから(？)。②基幹産業である米作を保護するためということなのですが、この支給された米の評判が、甚だよろしくない。私が知る教員で、この米を食べている人は一人もいません。「売る」か、使用人に与えるか、どちらかです。理由はおいしくない、時に変な匂いがするからというのです。日本で問題になったタイ米と同じですとも言われました。

さて、その米の価格ですが、1kg単位で調べてみました。インドネシア人が食べている米は概算ですが、1,200 Rp～1,600 Rp (50円～70円) と推測されます。中流階級以上のインドネシア人や外国人が食べる米は、チアンジュールという高地でとれる高級米で、価格差はありますが、2,500 Rp (100円) ぐらいでしょうか。日本人が食べるのはこのクラスでもなく、「インドネシア日本米」3,000 Rp (125円) かそれ以上のもの。カリフォルニア米です。これもいろいろあって、「国宝」が5,700 Rp (230円)、単に「カリフォルニア米」というのが6,500 Rp (260円)、「錦」と「松鶴」が7,500 Rp (300円、日本の政府米と同じぐらい)、最高が「田牧米」で9,300 Rp (410円) という次第。

日本の家庭で500円ぐらいの米を食べているとしますと、12,500 Rpです。ふつうのインドネシア人が食べる米の10倍、平均的カリフォルニア米の約2倍です。「国宝」は結構おいしい米です。それ

以上の米はいうまでもなく、日本の米である必要はありません。日本の米に国際競争力は全くない事がおわかりでしょう。

最後は酒。インドネシア人は、ほとんどがイスラム教徒ですから、アルコール類は飲みません。ですから、ふつうの店には置いてありません。ただし、ビールはその中に入れないらしく、生産していますし、どこでも売っています。今年、私が住んでいる新興高級住宅街のセテラサリ・クーロン地区は日本人が多いせいか、近所に日本食品の店が3軒もあります。そこでは日本酒もウイスキーもブランディも売っています。その価格を調べてみました。

日本酒（1升）
特撰金冠大関　48,500 Rp（1,940円）
超特級菊正宗　76,750 Rp（3,070円）
ウイスキー（760 cc）
ジョニーウォーカー・黒　67,250 Rp（2,670）
赤　34,000 Rp（1,360）
オールド・パー　71,500 Rp（2,860）
サントリー・ゴールド　64,500 Rp（2,580）

以上のような次第で、経済大国日本のイメージは虚像ではありませんでした。今バンドンには約300人の日本人が繊維産業を中心に生産活動を展開しています。ここで実績をあげればあげるほど、日本国内産業が空洞化するのだけれどとぼやきながら、台湾、韓国と激烈に競争しています。しかし、日本企業で働くことはインドネシア人の何よりの望みらしいのです。日本学科の人気は、日本企業の奮闘と無関係ではありません。

第3報　1995年9月6日着信分

外国へ来ると、思いがけない事に出くわすことがあります。帰国の日も近づきましたので、今日は雑談などしてみましょう。たぶん、これが最後のインドネシア通信になるでしょう。

＊ホチキス　この国の人は何でも、あたるを幸いホチキスで止めるのです。10年前はそんな事もなかったのに、今やホチキスなしの生活は成り立たないのではないかと思えるほどです。コピーは客本人はできません。店の者に頼まなければなりません。だから、何台もコピー機を置いている店では、従業員がたくさん居て忙しく動きまわっています。コピー機はほとんどが日本製で、けっこう繁盛しています。そのコピーの値段ですが、A4以下は50 Rp（2円）、B4は4円。ところが拡大を頼むと8円、これはおかしいですね。別のボタンを押せばいいだけなのですから。一番びっくりしたのは、ある本の、ある部分のコピーを頼むのにメモを渡したところ、その指示したメモを本の該当ページと一緒にパチンしてしまいました。私も本を大事にする質ですが、本好きな人ならば、どんなに怒るだろうと思いました。いくらなんでもひどすぎると思いませんか。以後は警戒して、「ホチキス無用」と書いて渡しています。

＊汚れた札　東京銀行でドルを引き出して旅行社に行き、そのドルで支払おうとしましたところ、受け取りません。汚れているからダメというのです。これが日本なら、途端に私は怒り狂って、「いいよ。お前のところなんかにだれが頼むもんか！」と怒鳴って飛び出すところでしょう。だいたいそんなに汚れていないのですから。話を聞いてみますと、この国の旅行社はみんなそうなのだという事です。ですから、銀行で「これは旅行社への支払いだからきれいなお札でください」といわなければいけないのだそうです。自分んとこでやりゃいいだろ。サービス業なのに全然わかっていない、と今も怒りがおさまりません。「だいたい、そんなに奇麗好きかよ！」。

＊治安　これは1部の特権階級に限ることなのですが。教員の中にこういう人が居ます。中学生の子供が朝学校へ行く時、自家用車で送り届けます。バスは大小あって結構満員なのですが、中に集団強盗団が居ることがあり、時計とか指輪とか、現金とかめぼしいものを奪って逃走するという話をよく聞きます。それを恐れての事でしょう。それは、まあいいのですが、子供は学校から帰ってきても、夕方から塾へ行きます。それも二つ別々の科目を教える塾へ行くので、その都度車に乗せて移動し、1日の終わりの午後9時、またまた迎えに行くというのです。治安もよくないし、交通事情も悪い。第一警察官に対する信頼感がほとんどないように見受けられます。なお、このところ2度ほど7人組の強盗団に日本人の住宅が襲われました。どうも同一犯人グループらしいのですが、一般に押し入った強盗サマが納得する金額は幾らかと聞きますと、100万Rpだそうです。日本円で4万円程度ですね。

「金持ち日本」という評価は、インドネシアでも誰もが知っています。しかも無防備だから襲うのです。ただ、山根對助氏のごときは、もともと人相は悪いし、風体もパッとしないし、それで被害を免れているかもしれません。　（次号に続く）

（やまね　たいすけ　教養部教授・日本文学）

新着図書 ――経済学部

地域農業の都市化対応　持田紀治著　明文書房　1985
日本の企業　今井賢一、小宮隆太郎編　東京大学出版会　1989
日本の企業と産業組織　三輪芳朗著　東京大学出版会　1990
日本型企業社会の構造　基礎経済科学研究所編　労働旬報社　1992
会計主体と資本会計　会計学基本問題の研究　酒井治郎著　中央経済社　1992
法人企業と現代資本主義　間宮陽介著　岩波書店　1993（シリーズ現代の経済）
英和会計経理用語辞典　新井清光編　中央経済社　1994
総合日本語初級から中級へ　水谷信子著　凡人社　1990
農村工学研究　54　農村開発企画委員会編　農村開発企画委員会　1994　**中山間過疎地域における集落の消滅・農地の荒廃　集落再編に関する調査1**
農業ソフトウェアブック　日本農業ソフトウェア協会編
主要農業経営部門についての経営の展望　21世紀初頭の農業経営の展望　21世紀農業経営研究会編　地球社
高度情報化プログラム　通商産業省機械情報産業局編　コンピュータ・エージ社
地域経済学　宮本憲一［ほか］編　有斐閣　1990
地球環境の政治経済学　新グローバリズムと日本　環境庁地球環境経済研究会著　ダイヤモンド社　1990
環境（グリーン）マーケティング戦略　エコロジーとエコノミーの調和　大橋照枝著　東洋経済新報社　1994
環境に良い会社　地球に優しい経営の条件　日経ビジネス編　日本経済新聞社　1991
体系グリーンマーケティング　ケン・ピーティー著　三上富三郎監訳　同友館　1993
環境経済学の理論と応用　ペーター・ネイカンプ著　藤岡明房［ほか］監訳　勁草出版サービスセンター　1985　（日本交通政策研究会研究双書　3）
環境監査入門　環境監査研究会編　日本経済新聞社　1992
環境リスクと環境法　米国編　東京海上火災保険株式会社編　有斐閣　1992
環境リスクと環境法　欧州編　東京海上火災保険株式会社編　有斐閣　1992
EC欧州統合の現在　金丸輝男編著　創元社　1987
環境問題と企業責任　企業社会における管理と運動　鈴木幸毅著　増補版　中央経済社　1994
環境保全と経済の発展　持続可能な発展を目指して　大蔵省財政金融研究所、環境保全型の経済発展の在り方に関する研究会著　ダイヤモンド社　1994
地球環境キーワード　環境経済学で読み解く　有斐閣（有斐閣双書　Keyword series）
地球環境と企業　市川彰編集責任　都市文化社　（社会と企業シリーズ　第6巻）
新地域主義論　神奈川・横浜のくにづくり　清水嘉治著　新評論
地域国際化のすすめ　地引嘉博著　ぎょうせい
新地方主義　分権時代の地方自治の展開　金子善次郎編著　ぎょうせい
新しい農業経済論　山口三十四著　有斐閣　（有斐閣ブックス）
通信・マルチメディアのしくみ　最新キーテクノロジーがわかる事典　図解・最新解説　青柳全著　明日香出版社
アジア太平洋地域の時代　――APECの設立の経緯と展望――　山神　進著　第一法規

世界女性会議に思う

第4回世界女性会議が9月4日から15日までの12日間の予定で北京で開催されており、これに先立ち8月30日からNGOフォーラムが始まっている。

1985年のナイロビ会議から10年ぶりにアジアで開催される。181か国、約1万2千人が参加し、21世紀の女性政策の国際基準になる「行動綱領」を採択する。行動綱領の草案は、貧困、教育、保健、暴力、紛争、経済、意思決定、地位向上、人権、メディア、環境、少女の12領域、362項目である。この冒頭にある貧困問題については、途上国では1日1ドル以下で暮らす人々が10億人以上いて大多数は女性である。

中国からの留学生に、アジアで世界女性会議が開催される意義等について、アジアの女性の一人として伺ってみた。

莫目根

国連世界女性会議は9月4日、北京で開催された。この大会の開催は全世界の女性にとって、〝自己解放〟の目標を実現する新しい一歩であるのだと思っている。

人類の文明と社会の発展史において、女性は大きな役割を果たしてきた。女性における経済、教育の発展水準は、社会発展の進歩の印とも言えよう。

20世紀には、女性解放運動の発展に伴って、女性の教育水準が向上し、女性の社会への進出もよ

法学部 —— 新着図書

(判例) 民事手続法 新堂幸司著 1994
現代国際関係法の諸問題 高野幹久著 1994
政治学概論 山川雄巳著 第2版 有斐閣 (有斐閣ブックス 63)
国連職員への道 現職スタッフによる応募から採用までのアドバイス 国連競争試験／外務省アソシエート・エキスパート選考試験 国連日本人職員有志の会[ほか]編集 増補版 世界の動き社
会社法概論 関俊彦著 商事法務研究会
(わかりやすい) 改正年金法 厚生省年金局年金課編著 1995 (有斐閣リブレ no.33)
刑事訴訟法 田宮裕編 改訂新版 北樹出版 1995
不動産紛争・管理の法律相談 吉田康編 青林書院 (青林法律相談 9)
人間開発報告書 1994 日本語版 UNDP (国連開発計画) 著 国際協力出版会
破産法の論証研究 本間法之、井上英治 新版 法曹同人 1993
行政法の基礎 金谷重樹著 晃洋書房
〈法の思想〉を読む 佐伯守著 晃洋書房
ビジネス法の常識 榎原猛編 嵯峨野書院
現代理論法学入門 田中成明編 法律文化社
人権各論 1 (15条〜21条) 早稲田司法試験セミナー論文対策委員会編 早稲田経営出版 (司法試験論文セミナー 憲法読本シリーズ)
人権総論 早稲田司法試験セミナー論文対策委員会編 早稲田経営出版
新・判例コンメンタール民事訴訟法 1 谷口安平、井上治典編 三省堂 **裁判所・当事者 1条ー88条 国際裁判管轄・司法共助**
新・判例コンメンタール民事訴訟法 2 谷口安平、井上治典編 三省堂 **訴訟費用・口頭弁論・送達 89条ー181条 民事訴訟費用法**
商法 1 第2版 有斐閣 (有斐閣Sシリーズ 19) **総則・商行為** 落合誠一 [ほか] 著
新・刑事政策 沢登俊雄 [ほか] 日本評論社
商行為法 森田邦夫編 青林書院 1993 (現代企業法講義)
刑法講義 各論 1 花井哲也著 信山社出版
デバイス刑法総論 択一・論文同時合格ノート 新保義隆、現代刑法研究会編著 改訂版 早稲田経営出版
解説商法 山崎孝康著 住宅新報社 **(司法書士シリーズ)**
近世私法史要論 H. シュロッサー著 大木雅夫訳 有信堂高文社 1993
刑事訴訟法 演習講義 安富潔著 法学書院 1993
環境訴訟 大気汚染訴訟における因果関係論 松村弓彦著 商事法務研究会 1993
使用人兼務取締役 小林英明著 商事法務研究会 1993 (商事法務アドバイス・シリーズ 6)
民事訴訟法 兼子一、竹下守夫著 新版 弘文堂 1993
アパートの法律 解決Q&A 100 借地借家問題研究会弁護士グループ編著 住宅新法社 1993
自分で考えるちょっと違った法学入門 道垣内正人著 有斐閣 1993
エキサイティング民事訴訟法 井上治典、高橋宏志編 有斐閣 1993
デバイス刑法各論 択一・論文同時合格ノート 新保義隆、現代刑法研究会編著 早稲田経営出版 1993
全訂民事訴訟法 1 菊井維大、村松俊夫著 補訂版 日本評論社 1993

うやく認められるようになった。そして、女性自身も社会活動への参加することによって、自分の視野を「家を守る」という狭い世界から、外部世界へと大きく拡げた。

女性解放運動の歴史を振り返ってみると、経済的解放がなければ、女性の解放は実際上不可能だ。即ち、女性はただ教育を受けても、積極的に社会に自分の知識と能力を発揮しない限り、まず家庭にそして社会にも男性と同等な発言権も、社会地位の向上にも不可能で、結果的に、「女性解放」は一つの机上の空論でしかない。実際、女性問題は色々な形で、様々な分野で未解決のまま存在している。発展途上国は勿論のこと、更に、貧困地域の国々では、女性が教育を受ける権利、婚姻自主権利、男女同一労働、同一賃金の権利など基本的人権を完全に守ることがまだできてなく、こういう地域では、女性問題を解決する社会環境をまず作り出すべきだ。

他方、先進国では、女性の地位が向上しても、男女賃金差別、女性の職場での「お茶くみ」の男女差別の実態が依然として改善されていない。

アジア地域の多くの国には、上述の問題を抱えながら、近年は新たな問題に直面している。例えば、東南アジアでは、貧富の差が激しくなってきて、少女が売春を行うケースが増えている。自己保護の知識がない為、エイズに感染してしまうのである。今回、アジアで初めて女性国際会議を行うことは、アジア諸国の女性にとっては、歴史的

新着図書 ――人文学部

和英諺・いろはカルタ　山口百々男、J.マックリンデン著　研究社出版　1985
良寛の実像　歴史家からのメッセージ　田中圭一著　ZΩION社　1994
フィリピンと日本　交流500年の軌跡　佐藤虎男著　サイマル出版会　1994
アジアから見た日本　金両基編　河出書房新社
日韓併合　森山茂徳著　吉川弘文館　1995（日本歴史叢書　新装版）
開戦前夜の近衛内閣　満鉄『東京時事資料月報』の尾崎秀実政治情勢報告　尾崎秀実、今井清一編著　青木書店
フロンティアと開拓者　アメリカ西漸運動の研究　岡田泰男著　東京大学出版会
日本女性史研究文献目録　3　女性史総合研究会編　東京大学出版会
溥儀日記　溥儀［著］王慶祥編集　銭端本［ほか］訳　学生社
日本植民地と文化変容　韓国・巨文島　崔吉城編著　御茶の水書房
東京裁判資料・田中隆吉尋問調書　粟屋憲太郎ほか編　岡田良之助訳　大月書店
近代交通成立史の研究　山本弘文編　法政大学出版局
近代日本軍隊教育史研究　遠藤芳信著　青木書店　1994
この北の風はどこへ吹く　山川力著　未来社
韓国から見た日本の歴史教育　李元淳著　青木書店
「韓国併合」前の在日朝鮮人　小松裕［ほか］編　明石書店
カリフォルニア日系知識人の光と影　松下志朗著　明石書店
幕末の天皇　藤田覚著　講談社
ニュースで追う明治日本発掘　1　鈴木孝一編　河出書房新社　1994　**戊辰戦争・文明開化・征韓論の時代**
ニュースで追う明治日本発掘　2　河出書房新社　**西南戦争・自由民権・毒婦お伝の時代**
ニュースで追う明治日本発掘　3　鈴木孝一編　河出書房新社　**板垣遭難・秩父困民党・鹿鳴館の時代**
ニュースで追う明治日本発掘　4　鈴木孝一編　河出書房新社　**憲法発布・大津事件・壮士と決闘の時代**
天皇のページェント　近代日本の歴史民族誌から　T.フジタニ著　米山リサ訳　日本放送出版協会（NHKブックス　719）
福沢諭吉　小泉信三著　岩波書店（岩波新書評伝選）
国民国家を問う　歴史学研究会編　青木書店　1994
朝鮮総督府の歴史　薮景三著　明石書店
ふるさと文学館　第23巻　木原直彦［ほか］編集　ぎょうせい　1995　**山梨**
ふるさと文学館　第25巻　ぎょうせい　1995　**岐阜**
太宰治論集　作家論篇　第1巻　山内祥史編　ゆまに書房
（角川）古語大辞典　第4巻　中村幸彦［ほか］編　たーは
世界映画全史　第4巻　ジョルジュ・サドゥール著　国書刊行会　1995
映画の先駆者たち――パテの時代1903－1909　村山匡一郎［ほか］訳
日本の名随筆　別巻　47　作品社　1995　**冗談**　河合隼雄編
冷泉家時雨亭叢書　第9巻　冷泉家時雨亭文庫編　朝日新聞社　1995
ちくま日本文学全集　1　筑摩書房　1991　**芥川竜之介　1892－1927　トロッコ・蜜柑・お時儀・鼻**
日本文化の起源　民族学と遺伝学の対話　佐々木高明、森島啓子編　講談社　1993

な意味を持つ重要な出来事である。

女性の人権が守られるのは法律である一方、女性自身の自立心と能力が重要な一つである。（終）

（モルゲイン　大学院経済学研究科修士1年
1995.9.14受理）

李　菡

今年9月4日から15日まで、中国の北京で第4回世界女性会議が開かれている。この会議は、女性に対する暴力、人権、雇用差別などさまざまなテーマをとりあげ、世界中の女性全体に対して大変意味があることである。

人権というのは、「人間が生まれながらにして持つ、自由、平等の権利」である。そういえば、女性の「人権」とは何でしょうか。どういうふうに女性は持つべき権利が持てるか。毛沢東の有名な言葉、「女性は天の半分を支えることができる。」というのは、本当に事実だった。人間として、女性は男性と一緒にこの世界を支えている。だから、女性と男性との間にあるのはただ生理的な区別であるだけで、同じように自由と平等の権利を持っていて、教育や仕事や婚姻等各方面で差別はないはずだ。

しかしながら、たとえ今の世界、特に発展途上の国々でも、多くの女性が、社会では雇用差別などの差別を受け、家ではただ夫のわき役として存在して、前に述べたような権利を持つことを主張してはいけないことになっている。女性についてこのようなもろもろの差別問題がまた続出してい

工学部 —— 新着図書

交通工学ハンドブック　交通工学研究会編　技報堂出版　1984

土木設計便覧　土木設計便覧編集委員会編　改訂3版　丸善　1990

ニューロ・ファジィ・AIハンドブック　計測自動制御学会編　オーム社　1994

情報ネットワークハンドブック　電子情報通信学会編　オーム社　1992

情報化社会と映像　樋渡涓二著　コロナ社　1995

ニューラルネットと計測制御　西川禅一　北村新三編著　朝倉書店　1995（システム制御情報ライブラリー　11）

Adobe Photoshop 2.5 J for Windows　柴田文彦著　アスキー（アスキー標準コースウェア）

Visual Basic for Windows　桜田幸嗣、高宮涼著　アスキー

日本語の文体　文芸作品の表現をめぐって　中村明著（岩波セミナーブックス　47）

Visual BASIC プログラミング　初級編　海老原浩之、川俣晶著　技術評論社

Visual BASIC プログラミング　中級編　海老原浩之、川俣晶著　技術評論社

迷わず使える！　Excel 5.0 基本操作入門 For Windows

らくらく使う!!　最短入門ガイド　新保剛平著　技術評論社

VISUAL BASIC for MS-DOS プログラムライブラリ　John Clark Craig 著　コム・クエスト訳　1993（マイクロソフトプレスシリーズ）

Aldus PageMaker 5.0 J for Macintosh　芹川宏著　1994（アスキー標準コースウェア）

Excel 5 オフィシャルコースウェア Macintosh 版　Catapult, inc. 著　小川章夫訳　アスキー　1995（マイクロソフトプレスシリーズ）

Excel 5.0 ビギナーズブック　アイティティ編著　翔泳社　1995

建築工事標準仕様書・同解説　日本建築学会編　1989

Excel Ver.5.0 レスキューマニュアル　福住護著　アスキー　1994

アドバンスド Visual Basic Challenge system　羽山博著　インプレス

Excel 5 マクロオフィシャルコースウェア Visual Basic for applications Windows 版　Reed Jacobson 著　小川晃夫訳　アスキー（マイクロソフトプレスシリーズ）

作例で学ぶ PageMaker 5.0 J DTP トレーニングブック　宮坂純子著　アスキー

Visual Basic 初級プログラミング入門　上　河西朝雄著　技術評論社

Visual Basic 初級プログラミング入門　下　河西朝雄著　技術評論社

フリーソフト＆シェアウェア pack 5000　For MS-DOS/Windows　1995 年前期版　ベクターデザイン編著

フリーソフト＆シェアウェア pack 2000　MS-DOS/Windows　1994 年後期版　ベクターデザイン編著　ベクターデザイン

CodeWarrior C プログラミング入門　小森良隆著　技術評論社

初心者のための ResEdit　D. シュナイダー［ほか］著　井川俊彦訳　1992

ラクラク NIFTY-Serve 入門　WTERM とマクロで使う PC-98 用　井上博嗣、山本美孝共著　インプレス

るので、今後も女性解放運動は必ず深く掘り下げて進行させねばならない。そのほか、女性解放と言うのは、国籍とか、人種とか、民族とか、階級とか、貧富等の区別がないはずで、女性同士は皆一緒に姉妹全体を解放し、一切女性を色めがねでみることを消滅させるために奮闘すべきであろう。

今のアジアでは、女性差別問題がまたいろいろな面で現れている。差別現象がもう少なくなるとはいえないのではないでしょうか。国家と地区によって、女性が持つレベルは大変違うと思う。それで、今度の第4回世界女性会議を初めてアジアで開くことは、特にアジアの国の女性に対して意味があることであろう。

さて、女性解放運動の発展は全社会の努力によらなければならない。この会議を機会に、女性の立派な将来を拓くために、われわれ女性として全社会と共に頑張っていかなければならないと思う。（終）

（リーカン　大学院経済学科修士1年
1995. 9 .14 受理）

「世界女性会議」本の紹介

・エンパワーメントの女性学
　村松安子・村松泰子編　有斐閣
・日本の女性と人権　　明石書店
・世界の女性と人権　　明石書店
・ナショナルレポート　大蔵省印刷局

新着図書 ――教養部

ビジュアル博物館　第50巻　同朋舎出版　1994　**ヴァイキング　ヴァイキングの戦いとその歴史を再発見**

ビジュアル博物館　第51巻　同朋舎出版　1995　**砂漠きびしい熱暑と寒冷の世界、砂漠　そこに暮らす人々と動物、そして植物たち**

明治工業史　5　日本工学会編　原書房　1995　（明治百年史叢書　第436巻）　**電気編**

テクストのぶどう畑で　イヴァン・イリイチ　岡部佳世訳　法政大学出版局　1995　（叢書・ウニベルシタス　466）

象徴と社会　ケネス・バーク著　森常治訳　法政大学出版局　（叢書・ウニベルシタス　448）

アルト・ソロ　アントワーヌ・ヴォロディーヌ　塚本昌則訳　白水社　1995　（新しいフランスの小説）

河合隼雄著作集　第7巻　河合隼雄著　1995　**子どもと教育**

異文化理解とコミュニケーション　1　三修社　1994　**ことばと文化**　本名信行［ほか］編著

大江健三郎全作品　第1期　大江健三郎著　新潮社　1994　**奇妙な仕事、死者の奢り、他人の足**

大江健三郎全作品　第1期　2　暗い川おもい櫂、鳥、不意の啞

大江健三郎全作品　第1期　3　青年の汚名、上機嫌、勇敢な兵士の弟

芽むしり仔撃ち　大江健三郎著　復刻版　講談社　1994　原版：1958

万延元年のフットボール　大江健三郎著　講談社　1967

日本の中の朝鮮　増補　太平出版社　1971　（シリーズ・日本と朝鮮4）

平安時代史事典　古代学協会、古代学研究所編　角川書店

日本語音声の研究　1　杉藤美代子著　和泉書院　1　**日本人の声**

忘れられた国ニッポン　デニス・キーン　講談社　1995

《図書展示会（No.22）》

北海学園大学附属図書館

展示期間：平成7年9月6日～12月27日

展示場所：図書館1F・展示コーナー

今回のテーマ：

「仏教・神道」展

～本学、北駕文庫所蔵古文書より～

※展示図書目録を配布中

【仏教・神道に関する貴重古文書41冊を展示】

1．融通大念佛本縁起（ゆうずうだいねんぶつほんえんぎ）　2巻2冊　別書名：融通念佛縁起
著者：融観
成立：元禄4（1691）、天保3（1832）版
融通念佛宗の開祖、良忍（1073～1132）の伝記にあわせて融通念佛を感得した由来、日本の神仏の結縁、道俗への念仏歓進、没後の奇跡、念仏の功徳・利益などを描いた絵巻。

2．融通念佛縁起絵（ゆうずうねんぶつえんぎず）
2巻2冊　上記の絵巻を巻物にしたものか。

3．十七憲法和解　原著：十七条憲法　原著者：聖徳太子（574～622）　成立：推古12（604）
注釈者：雪堂居士述　明治22（1889）　冠位十二階を定めて、忠勤を励まし、政府の秩序を正すべく、17条より成る憲法を定めて、政府の指針を与えた。仏教の公的受容が宣言された。

4．黒谷　法然上人一代記（くろだに　ほうねんしょうにんいちだいき）　10巻10冊　寛文6（1666）
浄土宗の開祖、法然（1133～1212）の一代記。

5．梵語千字文（ぼんごせんじもん）　京都書舗
額田正三郎　安永2（1773）〈他41冊を展示〉

気楽に読もう

（新刊書案内）

高倉新一郎著作集　全12巻

※第1巻　北海道史〔一〕　解説　永井秀夫

「高倉新一郎著作集」編集委員会編

（北海道出版企画センター　1995.9.15）

待望の「高倉新一郎著作集」第1巻　北海道史〔一〕が発刊された。主な内容は「北海道の歴史」「私たちの研究北海道の歴史」「北海道史について」等10篇が収載され、解説は永井秀夫（本学人文学部教授）先生があたられた。頁数は500頁で前頁に解説がある。北海道出版企画センターによると今後4年間で、全12巻の刊行を予定しているという。

先生の著作は単行本84冊、そのほか論文、書評、座談会、序文（市町村史）等1300余篇があり、ほとんどは手に入らない貴書である。先生の半世紀にわたった北海道の歴史研究書が「著作集」として刊行され感銘している。今後北海道史、北方史を研究される方々の北海道史の入門書、基礎資料としての北海道歴史参考書である。※高倉新一郎先生は母校北海道大学を1966年3月退職。北海学園大学第2代目学長（1968.6－1980.7）である。又数多く要職につかれ、新撰北海道史、新北海道史、新札幌市史などの編纂にもあたられた。

（C.Y）

わが国の地域開発政策と環境保全認識

小　田　　清

周知のように、戦後のわが国における地域開発政策は「経済成長至上主義」政策に呼応して展開されてきた。そして、その推進軸となってきたのが、公的資金投下を中心とする地域開発事業であり、これらが民間投資と結びつき、経済社会全体を「大量生産・消費・廃棄経済」の方向へと再編成してきたのである。

わが国において、このような地域開発政策が本格的に展開されるのは、所得倍増計画推進のために策定された全国総合開発計画（1962年）以降である。その内容は経済効率を第一義とする公共投資の拠点地域投下による開発方式が基本となっていた。したがって、そこでの地域開発政策の意味・内容は、ほとんど例外なく「地域産業の高度化＝工業化」を念頭に置いた「社会資本整備事業」が前提となっていたのである。

その後、国民の多くは、地域的なアンバランスの拡大に不満を示し、さらに環境破壊に不安を感じながらも、驚異的な生産力の上昇によって成し遂げられた量的な「豊かさ」に満足し、諸問題への批判は成長優先政策の中に埋没させられてしまったのである。そして、一般的には、このような「開発＝工業化＝経済成長」の図式による「繁栄」は半永久的に持続するものと受けとめられ、その背後で急速に進行していた「大量生産・消費・廃棄システムの限界＝飽和状態」については、それほどの疑念を抱かなかったのである。いわば「地域開発」という用語は、「経済成長」や「社会発展」の概念と同義的に使用されてきたのである。事実、その後に策定された第2次計画（1969年）では、高度経済成長をさらに加速化させる「大規模プロジェクト方式」が採用され、さらに国際競争力を強化しようとしていたのである。そこでは、すでに国連環境会議が中心議題としていた「環境保全」に関する国際協調の意識は薄く、環境破壊や公害問題は依然として一国・一地域内で処理できるものとされていたのである。

1970年代前半以降の低成長経済への移行は、これまでの「成長神話」に歯止めをかけ、環境破壊の方向を大きく転換する契機になるかと思われた。しかし、その後の開発計画でも依然として高成長路線を踏襲することになり、それは第3次計画（1977年）や第4次計画（1987年）でも大きく変化しなかったのである。その基本は、産業の海外（発展途上国）展開と国内のテクノポリス開発計画や大規模リゾート開発を中心とするGNP大国への回帰である。この結果、わが国の環境問題は、ますますグローバル化していくことになる。

今や、国内外で大きな流れとなってきている「持続可能な開発と環境保全との統合」は、このような開発計画内容を概観するだけでも、政策立案者にはその重要性が十分に理解されていなかったことがわかる。そして、これまでの日本政府や企業、国民の実際の行動は、環境保護の主旨には賛成、経済成長の停滞や生活水準の低下につながるような各種規制には反対という、いわば「総論賛成、各論反対」という矛盾に満ちたものが主流を占めていたのである。かりに、このような成長政策に不安があるとすれば、それは国内での制約よりも、むしろ国外に賦存する自然諸資源の有限性などが問題になるという外的な要因からの理解が一般的であった。

さらに問題の処理を先送りしたのは、このような地球的な規模での有限性や環境問題の到来は現在の問題でなく半世紀も先の話しであり、省資源や環境保全のための技術開発や経済社会システムの形成など、将来の問題は将来の人達が解決するだけの時間的な余裕は十分にあるとの楽観的な意見が支配的であったことでもある。このような認識をどう転換するのかが今後の重要な政策課題である。

（こだ　きよし　経済学部教授・開発政策論）

本との出逢い (2)

川は流れる

── 新潟の古本屋で拾いもの ──

コーニッシ篁子

「よろずよ橋はこちらの方ですか。」と尋ねると、「んだ、バンダイだね。」ごつい指が差した方へ雨の中を急いだ。会津八一館がこの道を尽きたところの防風林の手前にある筈である。

万代橋の下をゆったりと潜っている鉛色の水は信濃川、川幅千余m、新潟市の動脈の貫禄だ。激しくなって来た雨足を暫しやり過ごすつもりでアーケード街に右折れする。目にとび込んだのが「古本セール」のサイン。漫画の山積み、ノウハウ物、小説類、夥しい数の文庫本もある。……信濃の上流は、藤村の千曲川か……と記憶辿りをしている私の視覚が、「川」の字を捕らえた。長い立読みは見苦しいことと知りつつ、つい10ページも読んでしまって慌てて200円を払って求めたのが、野田知佑「日本の川を旅する」である。新潟の後、汽車を使って連休の数日を北陸・中部・東北を駆け巡ってみた旅に、この小冊が清冽な息吹きを与えて呉れた。カヌーこそ漕がないが、車窓から見える全ての川が音を立てて私の旅地図に水路をつけてくれたのである。

この春、ロンドンのテムズ河を後にして大韓航空で千歳にやって来る時にツンドラの中を光って蛇行するエニセイ河に目を凝らした。

河はものを言う。河は人の想いや言葉を奪い呑み下してしまう、そしてその堆積の上で返し言葉を発しているのだ。

武漢から重庚(チョンドン)まで大河を遡ってみた時、揚子江は怒っていた。佳景三峡がダム建設で潰されるという。鳥も鳴かない闇葉樹林が、もうすぐやってくる自分の運命に戦いて揚子江に訴え続けているかのようだった。釣中、足でもとられたものか着衣の男性の死体が舟とは反対の川下に、くるっと回りながら流れて行った。河神への生贄かと思えた。併し、命を水流に戻すのは東洋太古の思想である。ガンジスでは（ベナレスでの）岸辺に寄って来る躯(むくろ)を、本流に戻してやろうと長い櫂で突押す人達が居た。川岸にはヒンズー教焼場が所々あるのだ。ここでは死は水と親しく交わる。

野田は、「カヌーに乗ると川と自然はもう俺のものだ」と言って憚らない。河の幸の魚を時には把み捕りにして食べ、蝦を掬い、一人占めで流れをコントロールし、両岸の絶景に息をのむ。川の醍醐味はそこに入ってしまわねば味わえないものなのであろう。私にも子供の頃の郷里の川で泳いだスリルの記憶がある。今、玄海灘に注ぎ込むその川は、河岸工事のセメント堤防の間で、言葉の代わりに、農薬や人間の吐き出すゴミを無理に詰め込まれ拷問を受けたように口沫を出すどぶ色をしたお化け川となった。野田が嘆く死にかかった川は、何も都邑の多摩川だけではない。

タイ奥地で、水深はないが流れの早いメコンを筏で下ったことがある。竹を蔓や葦で組んだものだが、流れを右に左に曲がる時、向きに合わせて竹がずれて調整される。きしむ竹の隙間に足を取られた。「危ない、足を揚げろっ」ラオス人のガイドが叫んで踏み込む寸前の右足を、川底に潜む植物や岩端(はた)から救った。スピードがこれらのものを凶器に変えるからである。脚一本折れるのに何秒とかからない。野田も言っている。蛇行急流は避けよ……と。無智な旅行者であった自分が恥ずかしい。

野田は、日本の川はもとより世界中の河をめぐり、その姿、性質を千変万化に描写していっているそうだが、駄々をこねる河というのに出会っているだろうか。

天山山麓、シルクロード風に呼べば天山南路でのこと。カシュガールから烏魯木斉へのバス路線が中途で切れて、沙漠の真中に東と西からの車がトラフィックジャムを成していた。下を水が流れているでもない橋が崩れているのである。天山の雪解け水を導こうと架けられた橋の下を予定通りに流れてくれない。水達が、風のたわむれや砂地の予期しない吸水性で勝手に道筋を変えるのである。それが思わぬ処で道に挑みかかり、自分で水路を作ってしまう。幾カ所かバスを降り、炎天下を砂にまみれて歩かされた。道路建設に携わる人々には申し訳ないが、「治水」されない水の我侭が頬笑ましかった。そして、蕪村の〝春の水、河なき山を流れけり〟が、ここ新疆でもスケールを大きくして繰返されているのだと、自然の奔放さを讃えたくなった。

「日本の川を旅する」の読後、心に清河が注ぎ込み、自分の血行まで良くなった気がする。インスピレーションに富む好著だ。

豊平川も美しい。豊平と石狩川の出会いや歴史との関わりあいを描いた本を今探している。

（コーニッシ　せつこ　人文学部講師・英国文化論）

冒険家たちのプロローグ

たけうち　ひろこ

アメリカ歴史発祥の地であり、ピリグラム（清教徒）が到着し、独立戦争の急報を告げたポール・リビアが馬を走らせ、その後のアメリカの歴史と深くかかわってきたマサチューセッツ州。『若草物語』のルイザ・メイ・オルコット。『緋文字』のナサニエル・ホーソンや、『森の生活』のヘンリー・デービット・ソロー等、アメリカ文学を代表する作家が住んでいたニューイングランド地方。

紅葉の美しい秋は、数多くのアメリカ人がこの地を訪れ、学術研究学会、様々な会議で大変賑わっています。ところで、この時季になると多くの日本人留学生の関心は、毎年ボストン市のコンベンション大ホールで開催される日本企業合同就職説明会でしょう。

この説明会には、国際市場で活躍出来る優秀な人材を求めて、毎年800社を超す企業が参加しており、日本企業での就職を希望しているアメリカ各地をはじめ、カナダ、ヨーロッパからの日本人の留学生、研究者、ビジネスマン、また同様の希望を持つ外国人にとっては、海外から日本へ進出するための大きな窓口になっています。私が、ラファイエットホテルの営業部長だったある年の秋、この説明会を実際に企画している会社社長が日本からボストン会場を訪れることを知り、急いでその会場へ出かけて行きました。会場で最初に眼にしたのは、何人かのビジネスマンを前に、ドーンという大きな音で机をたたき、大声で激怒している人が居る光景でした。怪訝に思い理由を訊ねると、ボストン市のコンベンションビューローへ、来年の説明会の会場予約を申し込んだ所、「2010年」まで満杯と云われ、全く取り合ってもらえず関係者が困っている、と云うことでした。私が社長と話すことになったのは、そのことが発端でした。社長は、「来年、再来年の予約を取りつけた人には、今後この企業が関わるボストンでの宿泊の総てを任せる。」との事でした。

この依頼は、ビジネスの面からとても魅力的でした。私は、会場獲得の交渉は難航する予感を充分に感じてはいましたが、保守的で気位の高いといわれているニューイングランドの様々な人と会い、交渉の結果、本来の会場に加え2、3カ所の選択肢をも獲得し、翌年には、説明会が予定通り開催されました。

この企画を続けている会社社長のカリスマ性が大きく影響してか、社員一同精力的に働き、その勢いには圧倒されるものがありました。この時期、ホテルの宿泊は予約なしでは不可能に近いにも拘わらず、参加者の中には、行けばなんとかなると安易な人も居るものです。社長はホテルの自室を毎晩の様にそのような学生達の宿泊のために解放していました。企業の主としての厳しさの中にかいま見た社長の優しさでしたが、ボストン滞在中、遂に一度も笑った顔を見せませんでした。ボストンでの仕事を終え、ホテルを出る際に、「お陰で、大成功でした。有難う。」と、日本酒と数冊の本を置いて行きました。そのうちの一冊に、村松剛著、『評伝アンドレ・マルロオ』がありました。アンドレ・マルロオは、日本の文化に深い愛着と理解を終生抱き続けた文学者です。松村氏のあとがきにも「アンドレ・マルロウの生涯は、それ自体、波乱にみちた一つの物語です。」とありますが、偉大な冒険家アンドレ・マルロオとボストンで会った社長とは非常に共通点がある、そんな想いがしたものです。その本の著者である村松剛氏は、北海学園大学人文学部でイギリス文学を教えておられ、日本演劇界で知的な女優として高い評価を受けている村松英子先生のお兄様であると知りました。偶然が幾重にも重なり、様々な人との出会いがあり、心の中に豊かな印象として今も想い起こせることが何より嬉しい限りです。

（AV・LL準備室　竹内弘子）

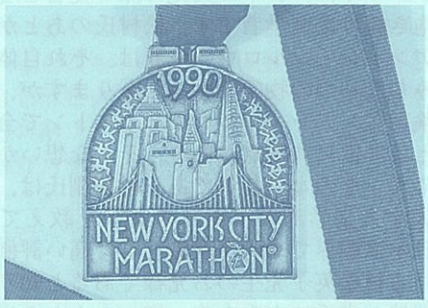
アメリカ研究生活覚書－その３－

ニューヨークの秋

竹内　潔

1990年11月、ハロウィーンが終わり、ニューヨークのセントラル・パークにも、さすがに落ち葉が目立ち始めて来る。第21回ニューヨークシティー・マラソンに参加するため前日にトロントでの学会を中座して、２日間だけ、ニューヨークへやってきた。アメリカで走ることを始めるようになったのは、〝Galloway's Book on Runnning〟に出会ったのがキッカケであった。この本は、従来のランニングトレーニング方法を大幅に見直し、修正するための実行案が説得力のある文章で提唱されていた。「あなたも、６カ月でマラソンが完走できる。」そんな謳い文句が魅力だった。ところが、一度はじめて見ると、時間との競争が面白くなり、１マイルをどれほど速く走ることが出来るのかに興味が移っていった。マラソンの距離は、およそ26マイル。１マイルを５分で走り切ると、マラソンは２時間11分でゴールすることが出来る。２年ほどのトレーニングで、10キロ、およびハーフマラソンなら、１マイルを５分20秒で走り切るところまでトレーニングした。ところがマラソンは、更に条件が複雑に重なり合い、今までのレース経験とはまったく別物であることはよく分かっていた。しかし、同じ年の４月にボストンマラソンを走破出来たことで、あこがれだったニューヨークシティー・マラソン参加を決めた。

レース前夜は、恒例の「パスタ・デナー」が開催され、ランナー達がこのレースのためのエネルギーを貯えた。会場には、カール・ルイスも参加しており、スポンサーの美津野スポーツの宣伝のため、自分のプロマイドにサインしていた。翌朝、秋の深まったニューヨークは、快晴。ゼッケン＃4888をつけ、ブルックリンの南端にあるベラザノ橋から２万５千人のランナーとひたすら、マンハッタンの北、セントラルパークまでの26マイルを目指す。この年の大会は、ブッシュ大統領のガン問題顧問、アルマンド・ハマー博士によって創設された「ストップ・キャンサー」のキャンペーンの一貫として「ストップ・キャンサーマラソン」と題され、〝Fred, This Run's for You!〟と謳われていた。脳腫瘍と闘う、このマラソンの創設者であるフレッド・リボウさんに捧げるためである。この年、58歳のリボウさんは、1950年にアメリカへ渡ってきたルーマニアからの移民で、1970年に第１回ニューヨークマラソンを企画し、運営した。最初の年は、参加者が127人、完走者が55人だったという。彼は、この年の２月、あと半年の命と宣告されていた。しかし、宣告から８カ月たったマラソン当日、例年どおりレース先頭の車で陣頭指揮に当たっていたリボウさんには、ランナーからはもとより、沿道からも心からの声援が送られていた。スタートからしばらく、貧しい街並みが続き、人種のルツボといわれるように、黒人、ヒスパニック、東洋系、ギリシャ系、中東系、等、様々な人種がニューヨークの下町で生活している。このレースのために、住民が道路に本物のドラム、弦楽器、ラッパ類ばかりでなく、本物のドラム缶までもちだし、それは賑やかな演奏で、ランナーを元気付けてくれる。よく肥えた黒人のおばさんが、音楽に合わせて大きな体を、スウィングさせている。マラソン当日は、彼等のお祭りでもある。確かに、ニューヨークでも、怖い場所の一つだと十分に納得できる沿道の様子であったとはいえ、今は懐かしく思い出される。20マイル地点のブロンクスにあるマディソン橋を渡り、再び南に折れ一路セントラルパークへ入っていく。この年の勝者は、日本でトレーニングを受けた、ケニヤからの青年、ワキウリだった。　（続く）



1990年ニューヨークシティマラソンの完走メダル

（たけうち　きよし　北海学園大学人文学部教授）

北海学園大学附属図書館報　図書館だより Vol.17　No.3（通巻135号）
本館　〒062　札幌市豊平区旭町４丁目１番40号　工学部図書室　〒064　札幌市中央区南26条西11丁目
☎（011）841－1161　本館内線　270～275・279　工学部内線　813・814　印刷所：㈱アイワード